

# 東京音楽大学リポジトリ

## Tokyo College of Music Repository

” Hotaru no hikari” and the farewell songs of the Olympic closing ceremony

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野曾原, 紗綾, Nosohara, Saaya メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1378">https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1378</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 《蛍の光》とオリンピック閉会式の別れの歌について

野曾原 紗綾

“Hotaru no hikari” and the farewell songs of the Olympic closing ceremony

Saaya NOSOHARA

キーワード：蛍の光 オリンピック 閉会式 別れの歌

### はじめに

著者は共同研究 A の授業内で 1964 年東京五輪の閉会式の映像を視聴し、閉会式の後半で《蛍の光》が演奏された場面に興味を持った。そこではマーチ風に編曲された《蛍の光》に合わせて、裏打ちの手拍子が鳴り響いていた。この時、日本国民と海外の参加者にとって、この歌はどのような意味を持つものであったのか、という点に疑問を持ったことが共同研究 A での研究の原点である。その後、著者は各国で開催された夏季オリンピックの閉会式で歌われた歌について調査を始めた。調査の対象は閉会式で聖火が消された、まさにオリンピックの最後に歌われた歌である。調査を進めると、各大会によって歌の内容だけでなく閉会式の演出についても変化していることがわかった。

この報告書では、授業内で発表した 2 つのテーマについて述べる。1 つ目は 1964 年に開催された東京大会の閉会式において歌われた《蛍の光》が当時の日本国民、海外からの参加者にとってどのような意味を持つ楽曲であったのかという点についてである。2 つ目は、各地で開催された夏季オリンピックの閉会式に注目し、そこで演奏された歌の内容や演出、演奏者に注目し、オリンピックの閉会式がどのように変化したかを述べていく。

## 1 《蛍の光》

### 1—1 東京大会での《蛍の光》

1964 年東京オリンピックの閉会式では、《蛍の光》は二つの形で使用された。一つ目は閉会式の後半、聖火が消された後に松明を使ったパフォーマンスとともに《蛍の光》が合唱されるといった形であるが、その後《蛍の光》の曲調は変化する。『第 18 回オリンピック競技大会東京都報告書』にその様子が書かれている。

「別離の哀愁がただようなかに礼砲 5 発が闇にとどろく。やがて別れのうた“ほたるの光“の合唱。フィールドに輪を描き、静かにゆれるたいまつのはのほ（ママ）。別れのうたのテンポが行進曲に変わったとき、フィールドの各選手は、夢からさめたように退場の行進に移った。7 万 5 千人が手拍子を取り、ハンカチをふる。選手もこれにこたえて別れを惜しむ。

電光掲示板は大きく MEXICO、またメキシコ・シチーで会いましょうと輝いている。  
(1965 東京都: 45)」

さらに《蛍の光》は閉会式後に開かれた、五輪組織委員会主催の「サヨナラ・パーティー」においても歌われたという記録がある。この会は 1964 年 10 月 24 日の夜に新宿御苑で 1 万 2 千人の関係者を招いて開催された。参加者には焼き鳥や天ぷらが振舞われたり、「SAYONARA」と書かれた舞台では坂本九が《上を向いて歩こう》を披露すると白人選手たちが手拍子を打って喜んだといった記録があり、賑やかなパーティーであったことがうかがえる。その最後に《蛍の光》は流れ、日本国民の参加者だけではなく、海外からの参加者も一緒になって歌ったことが記録されている。なぜ《蛍の光》を海外からの参加者が歌うことができたのかという点については、《蛍の光》の旋律はスコットランドの歌《Auld lang syne》のものであることから、日本国民以外の参加者にも馴染みのある歌であったことが考えられる。ここからは、《蛍の光》の旋律が日本国民と海外からの参加者のそれぞれにとってどのような意味を持つものであるのかを述べていく。

### 1—2 日本国民にとっての《蛍の光》

《蛍の光》が掲載された文献で最も古いものは、1881 年（明治 14 年）に編纂された『小學唱歌集 初編』である。《蛍の光》ではなく《螢》というタイトルである。【譜例 1】

【譜例 1】《螢》の楽譜（文部省音楽取調掛 1881：20）

歌詞は稲垣千穎によって書かれた。当時の唱歌の旋律はメーソン（Luther Whiting Mason、1818-1896）によって持ち込まれた讃美歌集の旋律から使われていることが確認されているが（安田 1993）、《螢》の旋律に関しても例外ではないと考えられる。このことについて中西は「1882（明治 15 年）、大阪で上梓された我が国最初の楽譜付き讃美歌集『讃美歌并楽譜』（美国派遣宣教師事務局）には、『オールド・ラング・ザイン』の楽譜が掲載され、

その曲に（中略）三つの歌詞が対応している。（中西 2012: 79）」と述べている。つまり、この旋律が唱歌として誕生した同時期に、讃美歌としても使われていることがわかる。

西洋から来日したこの旋律に、稲垣千穎によって歌詞がつけられ誕生した《螢》であるが、この歌は「卒業式の歌」や「別れの歌」として歌われるようになる。「卒業式の歌」として普及した要因として、中西は「1884（明治 17）年 2 月、東京師範学校小学師範科第三級前学期の唱歌の定時試業問題として『螢の光』独唱が課せられたという記録が残っており、この曲を歌唱できる教師が次々と生み出されていったことがわかる。（中西 2012: 86）」と述べている。ここから《螢の光》は卒業式といった別れの場面での歌として定着していったことが考えられる。

### 1-3 《Auld lang syne》について

一方、《螢の光》の原曲とされる《Auld lang syne》はスコットランドの歌で、作曲者は明らかにされていないが、作詞はロバート・バーンズ（Robert Burns、1759-1796）によるものである。《Auld lang syne》というタイトルは『増補改訂版ロバート・バーンズ詩集』（2009）によると《遙かな遠い昔》と和訳され、歌詞の 1 番の内容は次のようになっている。

” 古い友達づき合いの思い出が忘れられようか、  
心によみがえらぬはずがあるろうか。  
古い友達づき合いの思い出が忘れられようか、  
長い長いつき合いの思い出が！

（コーラス）

君、長いつき合いだったね、  
本当に長い年月だった。  
変わらぬ間柄を祝って一杯いこう、  
長く長くつき合ってきたのだから。”（東浦義雄 2009: 363-364）

このように古くからの友人と再会するといった内容である。実際に西洋でどのような場面で歌われているのかについては、照山によると「20 世紀には英米では『遙かな遠い昔』が大晦日から新年の歌として定着していたようである。そして現在では大晦日のカウントダウンが『ゼロ』になって新年を迎えると『ア・ハッピー・ニュー・イヤー』という掛け声とともに『遙かな遠い昔』が歌われ、年明け 1 週間ほど、エディンバラの街角でパイパーが『遙かな遠い昔』を演奏する姿が見られる（照山 2012: 107）」また、親しい友人との集会では「不滅の友情の象徴」として、全員で輪になり手を交差して握り合い歌うという記述が見られた。そのほか卒業式や船が港を離れて長い旅路につくとき、別れの歌としても使われている。

## 1-4 まとめ

東京大会の閉会式が終わった後に行われた「サヨナラ・パーティー」で《蛍の光》が歌われた時の様子が朝日新聞の記事に次のように書かれている。「十数人の選手たちが一斉に舞台にとび上がった。黒い頭、白い頭、黄色い頭が組み合った肩の上で笑い合う。舞台の下からもそれぞれの国の言葉でホテルの光がわきおこり、大合唱が御苑を包んだ。(1964年10月25日 朝日新聞 朝刊:14)」このように《Auld lang syne》は様々な場面で歌われ、《蛍の光》と同様に別れの歌としても西洋の人々に使われている歌であった。東京大会の閉会式での《蛍の光》は日本国民だけでなく多くの参加者にとっての別れの歌となり、会場中に響き渡ったことが考えられる。

## 2 夏季オリンピックの閉会式の変遷

### 2-1 閉会式で使われた歌とその内容

1964年東京オリンピックの閉会式では聖火が消された後、別れの歌として《蛍の光》が歌われた。一方、他国で開催されたオリンピックの閉会式において、同様の場面で使用された楽曲は別れの歌だけではなくあった。そこで1948年から2012年までの夏季オリンピックの閉会式に注目し、聖火が消された後の場面で歌われた歌について調査した。またこれらの歌の内容を調査し、使用された歌が閉会式でどのような意味を有しているのかを考察していくと、歌の選曲についても開催国によって変化が見られることがわかった。

開催年	開催国	歌	作詞	作曲	備考
1948	ロンドン	《Londonderry Air》の替え歌	Alan Herbert		当大会のために作詞
1952	ヘルシンキ	《Song of the Athenians》		Jean Sibelius	当大会のために行進曲に編曲
1956	メルボルン	《Goodbye Olympian》	William Tainsh		当大会のために《Waltzing Matilda》の旋律で作詞
1960	ローマ	《Hymn of the Sun》		Pietro Mascagni	『Iris』より
1964	東京	《蛍の光》			
1968	メキシコシティ	《Las Golondrinas》	Narciso Serradell Seevilla	Narciso Serradell Seevilla	
1972	ミュンヘン				大会中のテロを受けて合唱は中止
1976	モントリオール	《Farandole》		Georges Bizet	
1980	モスクワ	《Goodbye, Moscow》	Alexandra Pakhmutova	Nikolai Dobronravov	
1984	ロサンゼルス	《All Night Long》 《Auld Lang Syne》			
1988	ソウル	《Arirang》			閉会式の公式テーマソング
1992	バルセロナ	《Amigos para siempre》	Andrew Lloyd Webber	Don Black	公式テーマソング
1996	アトランタ	複数			アメリカの様々なジャンルの音楽
2000	シドニー	《Waltzing Matilda》			
2004	アテネ	複数			ギリシャの有名なアーティストたちのコンサート
2008	北京	複数			「カーニバル」というプログラム名で複数のアーティストが出演
2012	ロンドン	複数			有名なアーティストたちのコンサート

【表1】夏季オリンピック閉会式で歌われた歌

閉会式での聖火が消された後の場面に使われた歌は次の【表 1】<sup>1</sup>のようになった。まず、ロンドン大会では《Londonderry Air》の旋律に新しい歌詞をつけたものが歌われた。その歌詞を【図 1】に提示する。オリンピックが終わる瞬間の別れの歌と言える内容である。作詞者は文学委員会の議長である Alan Herbert (1890—1971) で、「《Londonderry Air》の曲に合わせて、この機会のための特別な歌詞を作ること」に同意した。(THE ORGANISING COMMITTEE FOR THE XIV OLYMPIAD LONDON 1948 1948 : 538) 」ことが記録されている。

*" The Race is run. The winner wears the Laurels,  
But you and I not empty go away ;  
For we have seen the least unkind of quarrels,  
The young men glowing in the friendly fray.*

*Let us be glad—but not because of winning :  
Let us go home one family today.  
God make our Games a glorious beginning.  
And, hand in hand, together guide us on our way.*

*If all the lands could run with all the others,  
And work as sweetly as the young men play,  
Lose with a laugh, and battle but as brothers,  
Loving to win—but not in every way.*

*Let us be glad—but not because of winning :  
Let us go home one family today.  
God make our Games a glorious beginning.  
And, hand in hand, together guide us on our way. "*

【図 1】 ロンドン大会(1948)で歌われた《Londonderry Air》の歌詞

(THE ORGANISING COMMITTEE FOR THE XIV OLYMPIAD LONDON 1948 1948 : 538)

次に開催されたヘルシンキ大会 (1952) では、シベリウス (Jean Sibelius、1865-1957) 作曲の《Song of the Athenians》を新しく行進曲に編曲したものがバンドによって演奏されたという記録がある。「master-composer によってこの機会のために特別に編曲されたものである (THE ORGANISING COMMITTEE FOR THE XV OLYMPIAD HELSINKI 1952 1952 : 701) 」が、この楽曲は器楽曲であり、歌ではなかったことが考えられる。

メルボルン大会 (1956) の閉会式では《Goodbye Olympian》が歌われた。この歌はオーストラリア国民に広く知られている《Waltzing Matilda》の旋律を使い、作詞されたものである。歌詞は【図 2】のように記録されており、その内容もオリンピックの選手たちへ

<sup>1</sup>作曲者、作詞者については各大会の公式報告書での記述があるもののみ記載した。

の別れの歌であった。作詞は、オーストラリアの詩人である William Tainsh (1880—1967) によるもので、伴奏はオーストラリア空軍の楽団によって行われた。

*" Homeward, homeward, soon you will be going now ;  
Momok wonargo or a go-yai,\*  
Joy of our meeting, pain of our parting,  
Shine in our eyes as we bid you good-bye.*

*Good-bye, Olympians ; good-bye, Olympians,  
(On comes the evening, west goes the day.)  
Roll up your swags and pack them full of memories,  
Fair be the wind as you speed on your way.*

*Blessings attend you, Fortune befriend you,  
All good go with you over the sea.  
May the song of our fathers—" Will ye no' come back again ? "  
Sing in your hearts thro' the years yet to be.*

*Come to Australia, back to Australia,  
(Mist on the hills and the sun breaking through)  
With the sliprails down and the billy boiling merrily,  
Wide open arms will be waiting for you."*

\* Aboriginal words meaning " Farewell, brother. By and by come back ".

【図 2】《Goodbye Olympian》の歌詞 (The Organizing Committee of the XVI Olympiad, Melbourne, 1956 1956: 716)

ここまで挙げたロンドン大会 (1948) からメルボルン大会 (1956) までの閉会式で使われた楽曲は、オリンピックのために開催国の伝統的な旋律を編曲、または新しい歌詞をつけて演奏されているが、ローマ大会 (1960) においてはそのようなことはなかった。また、その内容も別れを意味するようなものではなく、公式報告書<sup>2</sup>内にも「Song of Farewell」のような記述は存在しない<sup>3</sup>。ローマ大会では、オリンピック旗が退場する際に歌われた《Hymn of the Sun》が閉会式の最後に歌われた歌であることが考えられる。作曲者は Pietro Mascagni (1863—1945) でこの歌はオペラ『イリス (Iris)』の楽曲の一つである。

しかし東京大会では、再び閉会式で別れの歌が歌われる。オリンピックのために編曲や作詞をしたものではないものの、日本国民にとって代表的な別れの歌の一つであり、西洋でもその旋律が別れの歌として知られている《蛍の光》が選ばれたのである。

その後も閉会式では引き続き別れの歌が歌われる。メキシコシティ大会 (1968) ではメキシコの伝統的な別れの歌である《Las Golondrinas》が歌われている。この様子は当時の朝日新聞の記事にも書かれている。「聖火が消えたたとたん、花火が次々に打上げられ、夜空をこがした。数百人のマリアッチが奏でるメキシコのホタルの光『ゴロンドリーナス (つ

<sup>2</sup> (The Organizing Committee of the XVII Olympiad 1960)

<sup>3</sup> 他の大会の公式報告書では「Song of Farewell」だけでなく「Farewell Chorus」といった単語も使われている。

ばめの歌)』のうちに退場行進が始まった。『飛びさるつばめよ、そんなに急いでどこへゆこうとするのか』ソンプレロをうち振りながら散ってゆこうとする選手たちに、たまりかねたメキシコ人観客が次々にスタンドから飛出した。(1968年10月28日 朝日新聞 夕刊:1) 」

ミュンヘン大会(1972)においては開催中にテロ事件が起こり、イスラエルの選手団11名が犠牲となったことから、閉会式は簡素なものにすると決定された。そのため、閉会式では合唱やダンスなども一切行わないことにし、各国選手らは沈黙のままスタジアムに入場することになった。

モントリオール大会(1976)は、聖火が消された後別れの歌が歌われる場面は見当たらなかったが、選手たちが退場する際にビゼー(Georges Bizet、1838-1875)作曲の《Farandole》が演奏されている。その様子は「インディアンのタムタム太鼓が響き渡る。突然、五百人の少女が手にしたろうそくに火を灯す。それを合図に選手も観客も一斉に用意されたろうそくに点火。スタジアムは”ほたる火”が飛びかうように幻想的な無数のともしびにいろどられる。一瞬、賑やかな六拍子の『ファランドール』が高らかに鳴り響き、選手もインディアンも少女達も一緒に手をつなぎ、踊りながら東口へ消えていく。(1976年8月2日 朝日新聞 朝刊:3)」と記事にされている。

モスクワオリンピック(1980)では閉会式のために新たな歌が作られている。Alexandra Pakhmutova(1929-)作曲、Nikolai Dobronravov(1928-)による作詞の《Goodbye Moscow》である。この歌はモスクワオリンピックのマスコットキャラクターである「ミーシャ」とオリンピックに別れを告げる内容であり、歌の途中で「ミーシャ」の大きな人形が空に飛ばされるという演出がされた。

ロサンゼルス大会(1984)の閉会式ではライオネル・リッチー(Lionel Richie、1949-)の楽曲《All Night Long》が本人によって歌われている。この歌はオリンピックのために作られたものではないが、「party」(《All Night Long》歌詞より)を楽しもうと歌っている内容であり、彼の歌の披露は閉会式を大いに盛り上げるものとなった。また、その後《蛍の光》の原曲である《Auld rang syne》も歌われている。このことは公式報告書<sup>4</sup>中に記述されていないが、朝日新聞の記事によると「『ほたるの光』のコーラスが、祭典の終わりを告げ出した。一人ひとりが手にする青いライトが揺れ、スタンド全体が『さようなら』と手を振って別れを惜んでいるかのようだ。(1984年8月14日 朝日新聞 朝刊:1)」と書かれている。

ここまで、各大会の閉会式では別れを意味する歌が最後に歌われていることが多かった。しかし、ソウル大会(1988)からは別れの歌が歌われることはなくなる。ソウル大会の閉会式の主題歌は《アリラン》と1987年2月19日に決定されている。実際に閉会式では、ソウルの高校生による「Farewell」のパフォーマンスの最後に《アリラン》が演奏された。その後《アリラン》のテンポが速くなり韓国の円形ダンス「カンガンスルレ」のパフォーマンスへと移る。また、《アリラン》の歌詞はオリンピックのために新たに英語の歌詞が1988年4月にソウル国立大学の Kim Moon-hwan 教授によってつけられているが、《アリラ

<sup>4</sup> (The Los Angeles Olympic Organizing Committee 1984)



ン》は民謡であり、その歌詞の内容についてもオリンピックとの別れといった意味を持つようなものではない。

バルセロナ大会（1992）は閉会式の最後にホセ・カレーラス（Josep Carreras i Coll、1946-）、サラ・ブライトマン（Sarah Brightman、1960-）が Andrew Lloyd Webber（1948-）作曲の《Amigos para siempre》を歌っている。この歌のタイトルは公式報告書<sup>5</sup>では《Friends for life》と英訳されている。この歌はバルセロナ大会の公式テーマソングとされている。

アトランタ大会（1996）では聖火が消された後に別れの歌はなく、アメリカの様々なジャンルの音楽が披露されていることが記録されている。これ以降の大会においても閉会式では聖火が消された後も開催国のアーティストたちによって複数の楽曲が次々と演奏され賑やかなパフォーマンスが続けられており、別れの歌が歌われることはなくなった。

## 2-2 各閉会式の比較

ここまで各大会の閉会式で歌われた歌とその内容についてみてきたが、ここからは閉会式の演出が各大会でどのように変化しているのかという点に注目したい。そこで、今回は東京大会の閉会式の記事や、各大会について書かれた記事を比較し、閉会式の入場行進の様子と、歌に関する演出がどのように変化しているかを調査した。

### 2-2-1 閉会式の選手入場

東京大会の閉会式は各国の選手たちが入り混じって一斉に入場するという場面が特徴的であるが、この入場方法についても変化が見られる。ヘルシンキ大会では、閉会式に出席する選手はごく少数であった。この閉会式の様子について朝日新聞の記事では「すでにゲームを終った各国選手の大半は帰国しヘルシンキの見物客の姿もめっきりと減った。（中略）全参加国の国旗旗手の手で開会式の時のようにスタジアムに整列、各国とも選手一人が旗手として加わり日本は水泳の浜口選手旗手となって役員が参列（1952年8月4日 朝日新聞 朝刊：1）」したことが書かれており、東京大会のような大勢の選手が参加するといったものではなかったことがわかる。



【図3】東京大会閉会式の入場行進

各国の選手が一斉に入場する形をとったのはメルボルン大会の閉会式が最初である。ローマ大会では、選手の入場は再び旗手のみとなり、その後の東京大会では選手の入場も各国の選手達が入り混じって一斉に入場し、賑やかな閉会式であったことが記録されている

<sup>5</sup> (COOB' 92, S. A. 1992)

【図 3】。このことについて「黒人が行く。白人が並んで歩く。黄色い顔がのぞく。背丈もまちまち、服装はとりどりである。男女の別もない行進である。開会式に見られたような、足取りの統一はまったくない。しかし、そこには現在、オリンピックだけが示すことのできる調和がある。いっばいの力を出しきり、勝ち、敗れたスポーツ人の安らぎがあった。(1964 年 10 月 25 日 朝日新聞 朝刊：1)」と記されている。また、別の記事では「九十四カ国の大集会は、我々に『平和』というものの現実の姿を見せてくれたような気がする(1964 年 10 月 25 日 朝日新聞 朝刊：14)」と記述するなど、平和を思わせる閉会式を賞賛する記事が複数見られた。

しかし、4 年後のメキシコシティ大会では東京大会のような賑やかな入場行進とはならなかった。日本の新聞では賞賛の記事が書かれた一方で、当時のブランデー IOC 委員長 (Avery Brundage、1887-1975) は「非常に憤慨して『東京大会ただ一つの汚点である』」といていた。IOC 委員の間では、1965 年のマドリード総会以来、東京のような閉会式にならないために、なんらかの制限措置が必要だという話が出ていた(1968 年 10 月 23 日 朝日新聞 夕刊：6)」とあるように東京大会の閉会式の形を批判していたのだ。よってメキシコシティ大会では、格式と形式を重んじる IOC の考え方に従い、閉会式に参加できる選手は 1 国につき旗手を含めて 7 人と決定されたのである。さらにバルセロナ大会では、「従来の選手団入場行進をやめて、選手も観客と一緒にスタンドでミュージカル、オペラやフラメンコなどセレモニーを楽しんでもらう計画。行進の代わりにセレモニー途中の『ルンバ・カタラーナ』の音楽演奏の時に、スタンドにいる選手がフィールドに下りて、踊りの輪をつくって友好ムードを盛り上げてフィナーレを飾る(1992 年 8 月 8 日 朝日新聞 夕刊：6)」という形に変更されており、閉会式の選手入場の形は各大会によって変更が繰り返されていることが新聞記事からも見て取れる。

## 2—2—2 歌の演奏者と閉会式の演出について

次に先ほど述べた聖火が消された後の歌の演奏者や演出について比較していく。1948 年のロンドン大会での《Londonderry Air》は英国軍の楽団 (the Massed Bands of the Brigade of Guands) と合唱隊によって演奏されている。このように東京大会以前は対象の歌が合唱団によって歌われたという記録が複数見られたが、1984 年のロサンゼルス大会から公式報告書<sup>6</sup>に特定のアーティストによって歌われていることが記録され始める。ロサンゼルス大会では《All Night Long》をライオネル・リッチーが歌っている。加えて、閉会式の演出においてもこの頃から日本の新聞で大きく取り上げられるようになっていく。朝日新聞では聖火が消された後の演出について『ロス五輪 光のフィナーレ』と題された記事には「九万人の観衆が、会場入口で配られた懐中電灯の青い光を一斉に灯した。そこに上空から円盤が出現した。ヘリコプターでつるされた宇宙船の光線にフィールド中央の台に作られたライトが呼応、宇宙人が降り立つ。(1984 年 8 月 14 日 朝日新聞 朝刊：1)」と言ったようにその派手な演出の様子が記されている。

<sup>6</sup> (The Los Angeles Olympic Organizing Committee 1984)

ロサンゼルス大会以降、閉会式には主に開催国で著名なアーティストが参加し歌を披露することが一般化していく。アトランタ大会では閉会式のどの場面かという記録はないが、「スティービー・ワンダーのピアノと歌で『イマジン』が演奏された(1996年8月5日 朝日新聞 夕刊:15)」ことが記事にされている。バルセロナ大会では《Amigos para siempre》をバルセロナ出身のホセ・カレーラスがサラ・ブライトマンとともに歌っている。

その後のアトランタ大会からは聖火が消された後も複数のアーティストによって様々な楽曲が演奏されるようになっていく。公式報告書<sup>7</sup>によるとアテネ大会では「閉会式はギリシャの著名な歌手たちのコンサートによって締めくくられた(ATHENS 2004 ORGANISING COMMITTEE FOR THE OLYMPIC GAMES 2004:460)」という記録があり、北京大会では聖火が消された後のプログラムを「Carnival(公式報告書:252)」と題し、歌や踊りなどが披露されている。2012年のロンドン大会の閉会式では、アーティストの生演奏だけでなく、映像を活用してジョン・レノンの《imagine》が演奏されるなどの演出も行われた。

## まとめ

これまで述べたように、今回調査の対象としたオリンピックの閉会式は歌の内容、演出や演奏者に至るまで変更が繰り返され今に至ることがわかった。まず聖火が消された後に別れの歌が歌われた閉会式は、ロンドン大会(1948)、メルボルン大会、東京大会、メキシコシティ大会、モスクワ大会、ロサンゼルス大会であり、今回対象とした大会を年代別に並べた【表1】の上部に密集していることがわかる<sup>8</sup>。その後開催された閉会式では、別れの歌は歌われていない。

ソウル大会、バルセロナ大会ではオリンピック公式テーマソングが歌われ、さらにその後の大会では聖火が消された後についても複数のアーティストたちが歌などを披露するといったコンサートのような閉会式となっていることがわかる。

また、バルセロナ大会のような行進が行われない閉会式も存在し、さらに開催国で著名なアーティストが歌を披露するといった閉会式の形は、東京大会のような選手が主役の閉会式から選手や観客、そしてテレビの視聴者が楽しめるようなショーやコンサート形式の閉会式に変化していることがうかがえる。

今回、別れの歌が歌われた閉会式からコンサートのような閉会式への変化を遂げた要因を特定するまでには至らなかったが、授業内の発表の際に指摘されたように多くの人々がテレビなどで閉会式の様子を見ることができるようになった点や、広告に関する点など複数の要因が絡み合っただけの結果であるだろう。したがって今後は、閉会式の背景に当たる運営やオリンピックを観る人々の環境の変化などを詳しく見て考察する必要があると考える。

(博士課程2年 音楽教育)

<sup>7</sup> (ATHENS 2004 ORGANISING COMMITTEE FOR THE OLYMPIC GAMES 2004)

<sup>8</sup> 年代部分が赤色の背景の大会が閉会式に別れを意味する歌を採用したものである。

## 参考文献

THE ORGANISING COMMITTEE FOR THE XIV OLYMPIAD LONDON 1948

- 1948 *THE OFFICIAL REPORT OF THE ORGANISING COMMITTEE FOR THE XIV OLYMPIAD LONDON 1948. (London: THE ORGANISING COMMITTEE FOR THE XIV OLYMPIAD LONDON 1948)*

著者不明

- 1952 「オリンピック閉会式 四年後の再会約し散り行く選手たち」『朝日新聞』1952年8月4日朝刊:1.

THE ORGANISING COMMITTEE FOR THE XV OLYMPIAD HELSINKI 1952

- 1952 *THE OFFICIAL REPORT OF THE ORGANISING COMMITTEE FOR THE XV OLYMPIAD HELSINKI 1952. (HELSINKI: THE ORGANISING COMMITTEE FOR THE XV OLYMPIAD HELSINKI 1952)*

The Organizing Committee of the XVI Olympiad, Melbourne, 1956

- 1956 *THE OFFICIAL REPORT OF THE ORGANIZING COMMITTEE FOR THE GAMES OF THE XVI OLYMPIAD MELBOURNE 1956.*  
(Melbourne: The Organizing Committee of the XVI Olympiad, Melbourne, 1956)

The Organizing Committee of the XVII Olympiad

- 1960 *THE GAMES OF THE XVII OLYMPIAD ROME 1960 The Official Report of the Organizing Committee. (Rome: The Organizing Committee of the XVII Olympiad)*

著者不明

- 1964 「東京五輪の幕閉じる」『朝日新聞』1964年10月25日朝刊, 1.

著者不明

- 1964 「食べ 歌い 手拍子 新宿御苑でサヨナラ・パーティー」『朝日新聞』1964年10月25日朝刊, 14.

東京都

- 1965 『第18回オリンピック競技大会東京都報告書』(東京:東京都)

著者不明

- 1964 「メキシコ市で再会を 選手団大観衆と交歓」『朝日新聞』1964年10月25日朝刊, 15.

The Organizing Committee of the XVIII Olympiad

- 1964 *THE GAMES OF THE XVIII OLYMPIAD TOKYO 1964 The Official Report of the Organizing Committee.* (Tokyo: The Organizing Committee of the XVIII Olympiad)

著者不明

- 1964 「にぎやかな東京大会批判か 閉会式の参加者制限 メキシコ五輪」『朝日新聞』1968年10月24日朝刊: 13.

著者不明

- 1968 「ミュンヘンで再会 メキシコ五輪 幕閉じる」『朝日新聞』1968年10月28日夕刊: 1.

The Organizing Committee of the XIX Olympiad

- 1968 *THE GAMES MEXICO 68.* (Mexico: The Organizing Committee of the XIX Olympiad)

著者不明

- 1972 「合唱もやめる 簡素化の閉会式」『朝日新聞』1972年9月8日夕刊: 10.

著者不明

- 1976 「光とインディアン”幻想”を演出する閉会式」『朝日新聞』1976年8月2日朝刊: 3.

難波 利夫

- 1977 『イギリス歌曲の研究』(東京: 東京教学社)

The Organizing Committee of the 1980 Olympic Games in Moscow

- 1980 *Games of the XXII Olympiad.* (Moscow: The Organizing Committee of the 1980 Olympic Games in Moscow)

著者不明

- 1984 「ロス五輪 光のフィナーレ」『朝日新聞』1984年8月14日朝刊: 1.

The Los Angeles Olympic Organizing Committee

- 1984 *Official Report of the Games of the XXIIIrd Olympiad Los Angeles, 1984 Volume 1 Organization and Planning.* (Los Angeles: The Los Angeles Olympic Organizing Committee)

著者不明

- 1987 「閉会式主題歌にアリラン」『朝日新聞』1987年2月20日朝刊: 19.

The Seoul Olympic Organizing Committee

1988 *OFFICIAL REPORT Organization and Planning Volume1.* (Seoul: The Seoul Olympic Organizing Committee)

的地 修

1992 「閉会式も豪華演出」『朝日新聞』1992 年 8 月 8 日夕刊 : 6.

伊藤 千尋

1992 「火の海, そしてディスコになった閉会式」『朝日新聞』1992 年 8 月 10 日夕刊 : 7.

COOB'92, S.A.

1992 *Official Report oh the Games of the XXV Olympiad Barcelona 1992.*  
(Barcelona: COOB'92, S.A.)

安田 寛

1993 『唱歌と十字架 明治音楽事始め』(東京:音楽之友社)

著者不明

1996 「「イマジン」流れ選手は笑顔の輪 五輪百年飾る」『朝日新聞』1996 年 8 月 5 日夕刊 : 15.

The Atlanta Committee for the Olympic Games

1996 *THE OFFICIAL REPORT OF THE CENTENNIAL OLYMPIC GAMES Volume3.*  
(Atlanta: The Atlanta Committee for the Olympic Games)

Sydney Organizing Committee for the Olympic Games

2000 *OFFICIAL REPORT OF THE XXVII OLYMPIAD VOLUME TWO CEREBRATING THE GAMES.* (Sydney: Sydney Organizing Committee for the Olympic Games)

ATHENS 2004 ORGANISING COMMITTEE FOR THE OLYMPIC GAMES

2004 *OFFICIAL REPORT OF THE XXVII OLYMPIAD VOLUME 2 The Games.* (Athens: ATHENS 2004 ORGANISING COMMITTEE FOR THE OLYMPIC GAMES)

Beijing Organising Committee for the Games of the XXIX Olympiad

2008 *Official Report of the Beijing 2008 Olympic Games Volume 2.* (Beijing: Beijing Organising Committee for the Games of the XXIX Olympiad)

東浦 義雄

- 2009 「遙かな遠い昔」 『増補改訂版ロバート・バーンズ詩集』 (東京：国文社) 363-364.

中西 光雄

- 2012 『「蛍の光」と稲垣千穎 一国民的唱歌と作詞者の数奇な運命一』 (東京：株式会社ぎょうせい)

The London Olympic Committee of the Olympic Games and Paralympic Games Ltd.

- 2012 *London 2012 Olympic Games Official Report Volume 3.* (London: The London Olympic Committee of the Olympic Games and Paralympic Games Ltd.)

照山 顕人

- 2013 「唱歌におけるバーンズ詩受容と変容 一”Auld Lang Syne”と”Comin’ thro’ the Rye”を中心に」 『イギリスロマン派研究』 37 (大阪：イギリス・ロマン派学会) 105-114.